

平成 25 年度 日本音楽学会国際研究発表奨励金 受領者報告書

東京藝術大学大学院 音楽研究科 音楽文化学研究領域 音楽学研究分野博士後期課程 2 年
黒川照美（東日本支部）

1. 発表学会について

学会名：「第 2 回 国際音楽学会 東アジア地域会 International Musicological Society East Asian Regional Association, Second Biennial Conference」

大会テーマ：「MUSICS IN THE SHIFTING GLOBAL ORDER」

開催日程：2013 年 10 月 18～20 日

開催地：国立台湾大学

「国際音楽学会 東アジア地域会 IMS-EA」は、専門領域や主たる研究テーマにかかわらず、研究者が知見を交換し合う機会を設ける目的で 2011 年に発足し、大会の開催は本大会で二度目であった。

学会は 3 日間にかけて、国際台湾大学内にある CLA (College of Liberal Arts Building) および LEC (Liberal Education Classroom Building)、以上の隣接する二棟で開催された。基調講演、大会テーマを掲げた IMS ラウンドテーブルのほか、2 本のラウンドテーブルセッション、6 本のパネル発表セッション、19 本の個人発表セッション、4 本のポスター・メディア発表が行われた。各セッションにつき 1 時間～2 時間が設けられ、個人発表の持ち時間は、質疑応答を含めて 30 分であった。

東アジアでの地域会ということに加え、テーマの影響もあってか、西洋芸術音楽に関する、いわゆる伝統的なアプローチの発表は少なめで、例えば冷戦など、政治や社会と音楽との関係を問題にした発表が目立った。また、開催地である台湾をはじめ、アジアの伝統音楽を対象とする発表や、アジアの国々における西洋音楽受容やポップカルチャーについて論じる発表が多数行われた。

また、アジアの比較的若手の参加者が多く、100 名余りの参加者のうち、およそ 4 分の 1 を日本からの参加者が占めた。

2. 研究発表要旨

セッション：7G Performance Discourse

日時：2013 年 10 月 20 日 14:00-15:30

発表のタイトル：Socially Constructed Performance Categories: 'Historically Informed Performance' and 'Modern Performance'

【セッションについて】

申請者が発表を行ったセッションは、西洋芸術音楽の演奏を対象とした発表を集めたものであった。4本の個人発表のうち、1番目は申請者の発表、2番目は、ロベルト・シューマンの手のけがを事例に、身体と精神の関係を問題とする発表、マルグリット・ロンの言説分析を通して、演奏における「伝統」について論じた発表、4番目はグレン・グールドを対象に、演奏におけるオーセンティシティの問題について扱った発表であった。

以下、申請者の発表要旨を記す。

【発表要旨】

「古楽」と「モダン」という二元的なカテゴリーによる分類は、20世紀以降の演奏習慣を語る上での自明の分類のうちの一つとして、あらゆる場面で機能し続けている。しかし、演奏の現場においては、2つのカテゴリーは必ずしも明確に区分可能なものではなく、この分類は、演奏実践の場には確実に生じているはずの多様性を2通りの分類に「抑圧」する分類だと言える。各カテゴリーに属する要素は、知を創造する権利を持ち、アイデンティティを定義する立場にある知的専門家によって意図的に選出され、それぞれのカテゴリーの先験的な性質であるかのように見せかけられている。

こうしたカテゴリーのアイデンティティ構築にまつわる戦略的な駆け引きは、「アイデンティティの政治 identity politics」と呼ばれる。ケネス・ガーゲンは、アイデンティティの政治が展開される仕組みを、①抵抗、②自己同定、③本質化の3段階のモデルで説明している (Gergen, 1999)。本発表では、「古楽」と「モダン」という二元的なカテゴリーが構築される過程を、この3段階に分けて以下のように読み解いた。

まず、知的専門家が、「モダン」であり「主流」である演奏に対し抵抗する「歴史的オーセンティシティ」という新しい演奏のアイデンティティを生み出す。次の段階では、この新しいアイデンティティを有する演奏家が自らその定義をコントロールし、知的専門家の役割を兼ねてゆく。最後の段階では、「歴史的オーセンティシティ」を追求する演奏家集団を「古楽」、それ以外の演奏家集団を「モダン」と名付け、それぞれの活動を第三者の視点から描写する知的専門家が現れる。彼は実は「古楽」の内部に属する立場にあるため、その描写は、「古楽」側の利害を反映したものとなるが、客観的な叙述のスタイルがそうした恣意性を覆い隠し、両カテゴリーのアイデンティティは戦略的に本質化されてゆくのである。

3. 質疑、反響と感想

【質疑と反響】

発表を終えた直後の司会者からの講評では、「古楽対モダン」という問題に対し、極めて新しい見解をもたらすものであったという意見をいただくことができ、大変励みになった。

その後出た2つの質問のうち、1つは、音楽家が古楽、モダンのどちらかの立場を選ぶ理由について問うものであった。この質問に対しては、発表者がこれまでに行った、日本

のモダン・オーケストラの団員に対するインタビュー調査で得られた発言を参照し、以下のように答えた。彼らは自分たち「モダン」の演奏家と、「古楽」の演奏家とを明確に区別する発言をした。その理由としては、「『モダン』の演奏家である自らは、感覚的に良いと感じるものでなく、史実に基づくものを良いと考える『古楽』の演奏家とは異なる」からだと説明する。彼らは、「古楽」の演奏家というものは、『モダン』とは異なる演奏理念を抱いている「他者」だと捉えている。

2つ目は、「こうした演奏家のアイデンティティとカテゴリーを結びつけることで論じられる理論上の図式は、実際の演奏にどの程度当てはまるのか」というものであった。この質問は、人種や性別のアイデンティティの認識について論じるためのガーゲンの理論を、演奏という領域に当てはめることにどの程度有効性があるのかを問うものであったと考えられる。この点は、この発表が課題とすべき最大のポイントであり、今後の研究にとって極めて重要な意味を持つ質問であった。

【感想】

申請者にとっては英語で個人発表を行う初めての国際学会であり、不慣れなことも多かったことに加え、最終日の最終セッションでの発表であったため、ほぼ最後まで気を抜くことができず、そのうえで英語の発表を連続で集中して聴くというのは大変な気力を伴う経験であった。そのような状況下では、日本人の参加者が多く、いざというときに助け合えるという環境は非常に心強いものであった。申請者が在籍する東京芸術大学で普段からお世話になっている福中冬子先生をはじめ、困っていたときにあたたかくサポートして下さった参加者の方々に、この場をお借りして御礼申し上げたい。

また、大会のサポートスタッフの働きは大変素晴らしいものであった。発表を控えて緊張しているのが伝わったのか、スタッフ自ら気を遣ってあたたかいコーヒーを持ってきてくれて、「リラックスして」「頑張って」と声をかけてくれたことで、随分緊張が和らいだ。

そして何より、海外の研究者と英語で会話をし、研究について意見を交わすことができた経験は、大きな励みとなった。アジア諸国における音楽教育に関する議論、日本のJ-POPをアジアの別の国の研究者が扱った研究など、アジア圏での国際学会ならではの発表を多数聴くことができたことも、大変有意義であった。また、英語による多様なプレゼンテーションの仕方を学ぶことができた経験は、今後国際学会での発表を行う上で極めて役立つであろう。

最後になりますが、この度の学会参加に当たり、資金を援助下さった住友生命保険相互会社ならびに日本音楽学会に、心より厚く御礼申し上げます。